

癌の再発を三度も繰り返して「あと数カ月のいのち」と覚悟をきめている友人を、ニューヨーク・グリニッチヒレッジのアパートに見舞った。そしてさまざまなお話を教えられた。

まずびっくりしたのは、彼女が、まるで病人らしくないことだった。約束の時間に、ドアを開けると、薄化粧し、美しく髪を整えた彼女が現れ、「近くにとてもおいしい店があるの。案内するわ」とほほえんだ。

友人の名は千葉敦子。国際経済や政治、軍事を得意とするフリーランスのジャーナリストで、私の高校時代のクラスメートである。六年前に乳癌の手術をし、二年后に再発。その治療を終えると、ニューヨークに移り住んだ。そして再々発を化学療法で切りぬけたのだが、昨春秋、

「病人」であった。歩いて数分のレストランから帰宅すると、ぐったりしてしばらく横になっていなければならぬ。長く話すとセキが止まらなくなる。床掃除などとうていできない……。

しかし、休憩をはさみながら、ワープロに向かって原稿を書くことができる。パソコンを操作してアメリカ中の情報を検索し、コメントをつけて「ウーマンウォッチ」というニュースレターを発行している。

かすれ声ながら電話で友人とおしゃべりすることができる。手をのびせば本もある。気に入っている家具がある。日本から連れてきた猫もそばにいる。気分がよい時は簡単な食事を作ることだってできる。気楽な小パーティーを自宅で開くことさえできる。

これらすべてが、彼女の残り少ない人生を輝かせ、おそらく寿命を長くすることにも貢献することだろう。

しかも、このようなことは、ニューヨークでは決して例外でないようなのである。癌治療で有名なスローン・ケタリン

が、または、もっと重い病状なのに、ドレスアップし、私の案内をしてくれるという。

その時のことを彼女は「死への準備日記」(朝日ジャーナルに連載中)のなかこう書いている。

「私(注、千葉さんのこと)が病人らしくないようすをしているので、彼女(注、大熊のこと)は、私が重病人であることを忘れ、ふつうの歩調で歩いてしまうので、私は何度も彼女に「もうすこしゆっくり歩いて」と頼まなければならぬ。しかし、こうして

● ジャーナル

# 「春日方式」を病者のためにも

大熊由紀子 ● 朝日新聞論説委員

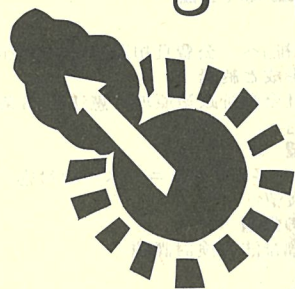


illustration: F.YANAGIDA

パーセント入院させられていたことだろう。そして日本の入院患者たちのようすの、なんと「病人らしい」ことか。寝巻姿でベッドに横たわり、青白い顔で、時間の過ぎるのをただ耐えている人が多く見られる。その人たちと同じ。

グ記念病院を訪ねて驚いたのだが、そこには、千葉さん同様、重症癌患者が通院で化学療法を受けていた。そしてその大多数の人が、イアリングや口紅で身ざれいにし、ジョークをとばしたりしていた。

人は「老人」としてあつかわれれば年寄りくさくなり、「ねたきり」あつかいされればねたきりになってしまう。狂人あつかいで鉄格子に閉じこめればそれらしくなり、病人あつかいされればいかにも病人風になる。

その結果、施設や病院はどんどん増え、その費用は私たちの子や孫の代にはどうも支払えないような額になることだろう。費用のことは智者が何か妙案を考へ出すかもしれない。おそろしいのは「生きていくことの質」がとめどなく低くなっていくことだ。

どうすればお年寄りも障害をもつ人もそして病人も「質の高いのち」をまっとうすることができるだろうか。

ことしの朝日社会福祉賞に決まった福岡県春日市社会福祉協議会会長の本田義

信さんたちの運動は、その一つの解答であるように私には思われる。

「春日方式」は三百六十五日一日も休まぬ老人給食で知られている。しかし「老人」とか「給食」とかは春日方式のほんの一断面である。春日方式は、日本で生まれた「やまと言葉のノーマライゼーション哲学」ではないだろうか。温かい昼食と夕食は、お年寄りだけに配られているわけではない。目の見えない人や母子家庭にも、住みなれた町でふつうに暮らす幸の女を可能にする基盤をつくっている。そして食事以外にもさまざまな独創的なサービスやシステムを生み出してきた。これをさらに広い分野に広げられないだろうか。

幸い、運動の全貌をさまざまな視点から浮きぼりにした本「しあわせへの挑戦——春日市社協の実践」が全社協から出版された。「ノーマライゼーション」という言葉を聞いたこともないようなお役人や医療、たとえば精神医療や癌・難病の診療にたずさわる人たちがこの本を読み、何かを感じとり、福祉関係者と手をたずさえて行動に移してくれたら、と私は夢みている。

「春日方式」は、日本でも生きた「やまと言葉のノーマライゼーション哲学」ではないだろうか。温かい昼食と夕食は、お年寄りだけに配られているわけではない。目の見えない人や母子家庭にも、住みなれた町でふつうに暮らす幸の女を可能にする基盤をつくっている。そして食事以外にもさまざまな独創的なサービスやシステムを生み出してきた。これをさらに広い分野に広げられないだろうか。

幸い、運動の全貌をさまざまな視点から浮きぼりにした本「しあわせへの挑戦——春日市社協の実践」が全社協から出版された。「ノーマライゼーション」という言葉を聞いたこともないようなお役人や医療、たとえば精神医療や癌・難病の診療にたずさわる人たちがこの本を読み、何かを感じとり、福祉関係者と手をたずさえて行動に移してくれたら、と私は夢みている。

「春日方式」は、日本でも生きた「やまと言葉のノーマライゼーション哲学」ではないだろうか。温かい昼食と夕食は、お年寄りだけに配られているわけではない。目の見えない人や母子家庭にも、住みなれた町でふつうに暮らす幸の女を可能にする基盤をつくっている。そして食事以外にもさまざまな独創的なサービスやシステムを生み出してきた。これをさらに広い分野に広げられないだろうか。